

北米邦字新聞の敬語使用

－「加州毎日新聞」の皇室敬語－

篠崎晃一（東京都立大学人文学部）

中井精一（富山大学人文学部）

1、研究のあらまし

本研究は、日本の近代化の過程で形成され、現在わが国と密接な関係にある北米日本人社会（南部カリフォルニア日系人社会）における日本語がどのように運用され、表記されてきたかといったことに注目し、その社会で刊行された邦字新聞（加州毎日新聞）の分析をとおして海外日系人における日本語の変遷とその特質をさぐることを目的としている。

北米日系人社会では、1886年（明治19）にサンフランシスコで発行された「東雲雑誌」にはじまり、「新日本」（オークランド）、「桑港新聞」（サンフランシスコ）、「北米時事」（シアトル）、「羅府新報」（ロサンゼルス）、「ユタ日報」（ソルトレイクシティ）などがつぎつぎと誕生した。

本稿では、1931年（昭和6）にロサンゼルスで誕生した「加州毎日新聞」を対象にその敬語使用について報告する。

2、加州毎日新聞について

「加州毎日新聞」は1931年11月ロサンゼルスにて発刊された海外日本語新聞（日刊紙）である。この新聞は、藤井整（元八幡製鉄所外事部主任で、渡米後ロサンゼルス日本人会会長をもつとめた）が社長となって創刊した。「加州毎日新聞」は、1942年2月21日から1947年8月10日までの太平洋戦争による休刊期間を除き、1980年12月の廃刊までおよそ50年間、南カリフォルニア日系人社会の主要新聞として発行された。

紙面は「加州毎日新聞」の読者層である南カリフォルニア日系人社会およびこの地域の社会・経済・政治の動向が記事の中心になっている。また、読者層がもっぱら移住一世であることから、日本本国の社会・経済・政治・外交等の記事が多く、移住先であるアメリカ合衆国に関する記事は時代とともに増加するものの全体としては少ない。

3、資料について

資料の分析対象は、「加州毎日新聞」が創刊された1931年から10年間隔で、1941年、51年、61年、71年、81年の各紙面を取り上げる。しかしながら、本紙は1980年12月をもって廃刊されたため、80年代に関しては1980年の紙面を対象とした。

今回、これらのなかから昭和天皇の全国巡幸の時期にあたり、皇室関連記事が豊富に採集可能な1951年のデータをもとに、「加州毎日新聞」における敬語使用についての報告を行うことにした。

4、分析の視点とその方法

今日の新聞がその原則として敬語表現を用いるのは「皇室」に限定されている。今回、対象とした戦後の「加州毎日新聞」においても、我が国の現状と同じように「皇室」以外には敬語表現は認められなかった。新聞がニュース記事の中の敬語表現を天皇・皇室だけに限定していく過程は、昭和22年8月に当時の宮内当局と報道機関とのあいだで基本的な了解ができ、昭和34年の皇太子ご成婚の折りに統一される。

昭和22年の基本合意は昭和27年の「これからの敬語」において一部示されているが、その大筋は昭和34年の皇太子ご成婚における統一を待ずとも、昭和31年に発行された「新聞用語の手びき」（朝日新聞）に見られるような整然とした用語の統一が、昭和22年の御基本合意にもとづいてすでになされていたものと考えられる。

そこで、この流れにしたがって、戦後の新聞（日本）における皇室敬語の変遷とその基本ルールを確認してみる。

昭和27年4月の国語審議会建議「これからの敬語」の第11項「皇室用語」によれば、

これまで、皇室に関する敬語として、特別にむずかしい漢語が多く使われてきたが、これからは、普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使うということに、昭和22年8月、当時の宮内当局と報道機関との間に基本的な了解が成り立っていた。その具体的な用例は、たとえば、

「玉体・聖体」は「おからだ」

「天顔・龍（りゅう）顔」は「お顔」

「宝算・聖寿」は「お年・ご年齢」

「叡慮・聖旨・宸襟（しんきん）縊旨」は「おぼしめし・お考え」などの類である。

その後、国会開会式における「勅語」は「おことば」となり、ご自称の「朕」は「わたくし」となったが、これを今日の報道上の用例について見てもすでに第六項で述べた「れる・られる」の型または「おーになる」「ごーになる」の型をとって、平明・簡素なこれからの敬語の目標を示している。

昭和31年に発行された朝日新聞の「新聞用語の手びき」のなかの「皇室用語集」では、以下のように示されている。

皇室用語について

一、皇室記事は極端に丁寧な尊敬語や階級的な表現をさげ、皇室に対して国民の親愛と尊敬の念が感じられるような表現が望ましい。具体的にいえば、皇室にだけの特別な敬語を止めて、われわれが日常生活で普通に使っている敬語の中の最高のものを使うということである。

一、天皇は国法上独自の身分が決まっているので、公的な御行動についての用語の中にはそのまま皇后の場合に使用できないものがある。

一、天皇が公的に行動されるときは、その記事も多少固くなるのもやむを得ないが、私的な御動静を報ずる場合は、できるだけやわらかい表現をすることが望ましい。

一、用語はやむを得ない特殊のものを除いては、すべて当用漢字で書くことを原則とする。

用語例

一、皇室の方々の名称

今上、主上、聖上、お上 = 天皇陛下、陛下、天皇様

国母陛下、皇后官 = 皇后陛下、陛下、皇后様

皇儲殿下 = 皇太子殿下、殿下、皇太子様

一、皇族の方々の名称

皇族には、殿下、官様、様を用いる。単に「殿下」と書く場合に「宮殿下」とは使わない。例えば初めに「秩父宮殿下」とあって、続いてこれを受けて出すとき

は「宮殿下」と書かずに「殿下」とする。

(注) 天皇陛下、皇后陛下は書き放しにせず、陛下、様をつけ、皇族には殿下、様をつける。(皇室典範第二十三条参照) ただし「天皇の地位」などのように現実の天皇を対象としない場合は敬称はいらぬ。年の若い方や女の宮様には「様」、「さま」を使った方がやわらかくてよい。

一、御身边に関する用語

玉体 = 御身体

玉音 = 御徒歩、お歩きになる

宝算、聖寿 = 御年齢、お年

御不予、御不例、御違和 = 御病気、おひきこもり

聖徳、乾徳 = 御徳

聖旨、聖慮、御軌念、宸襟、思召、台慮 = 御意向、お心、お考え、御憂慮、御心配

御真影、御尊影 = お写真、御肖像

一、御行動について

天覧、叡覧 = 御覧

御下問 = 御質問、お尋ね

親臨、台臨 = 御出席、お出まし

行幸、巡幸、行啓 = 御旅行、御視察、御巡視、御巡行

還幸、還御 = 御帰還、お帰り

下賜 = 御寄付、御増与、贈られ

薨去 = 御死去、御永眠、おなくなり(御逝去は使わぬ)

崩御 = 皇室典範に「天皇が崩じたときは」とあるので、天皇の場合にだけ使う。

一、儀式関係その他

参内 = 参上、皇居に伺い

拝謁、賜謁 = お目にかかり、お会いになり

謁見 = 接見(謁見式 = 接見式)

奉呈 = 提出(信任状を奉呈 = 信任状を呈出)

上奏、奏上、言上 = 御報告、申上げる

陪食 = 御会食になり、食事を共にせられ、御昼食の招待を受け

陪乗 = 同乗

御製 = 御歌、お歌

宸筆 = 御自筆、御真筆

玉座、御座所 = 御席

便殿 = 御別室、御別席、御休息所(場所を具体的に書く)

行在所、御泊所 = 御旅館、御宿舎

御駐泊 = 御宿泊、お泊り、御滞在

御嘉納 = 御受納、お納めになり、お受けになり

勅語、詔勅 = お言葉

勅使 = お使

奉迎 = お迎え、御歓迎

奉迎所 = 歡迎所

奉迎門 = 歡迎門

奉送 = お送り、お見送り

祭条料 = お供料

献上 = 差上げる

献上品 = 贈呈品、おみやげ

供奉 = お供、随員
奉答 = お答え
奉答文 = 答辞
奉祝文 = お祝文、歓迎文
御召列車 = 特別列車
発御 = 御出発、出発され
着御 = 御到着、お着き
御進講 = 講義申上げる

このように朝日新聞では、皇室に対する敬語の運用法についての原則細かにもうけている。

これは、昭和27年4月の国語審議会建議「これからの敬語」の第11項「皇室用語」をふまえたもの、あるいはそれ以前に報道機関および当局との協議で定められたルールに沿っているものと考えられる。そして、これが今日のような形で統一されていくのは、昭和34年4月の皇太子の結婚が契機となる。皇太子の結婚に先だって、新聞や放送で使用する同儀式関係の用語や一般皇室用語が、社によって変わった形で使われるのを防ぐため、日本新聞協会の新聞用語懇談会は、その統一を宮内庁記者会に依頼し、公表されたことによる。

この見解をふまえた「朝日新聞」の皇室に対する敬語表現の主な原則は、以下のとおりである。

- 1、戦前、皇室だけで使われていた特別な敬語はやめ、一般敬語のなかの最上のものを用いる。
- 2、敬語の重複使用を避ける。(例)ご出席される　ご出席になる・出席される
- 3、「御」は常用漢字表で「ご」と読むことは認められているが、固有名詞化されたもの以外は、なるべく「ご」と仮名書きする。(例)御結婚　ご結婚　東宮御所
- 4、公式には、皇室典範の規定に従い、天皇・皇后・太皇太后の敬称は「陛下」それ以外の皇族の敬称は「殿下」とする。記事の種類によっては、親しみを表すために「陛下」「殿下」を「さま」としてもよい。
- 5、見出しなど簡潔を必要とする場合には、「天皇ご日程」「皇后お歌」などと省略することもある。
- 6、天皇・皇后・太皇太后・皇太后を贈り名で呼ぶ場合には「明治天皇」「貞明天皇」のように敬称をつけない。また、法制上の身分を表す場合にも「天皇は国の象徴である」のように敬称をつけない。
- 7、「皇太子ご夫妻」「宮ご夫妻」と書いてもよいが、天皇・皇后の場合は「ご夫妻」は使わない。
- 8、多数の皇族を列記するときは「殿下」「さま」をつけずに「……の各皇族方」のように書く。(例)秩父宮妃、高松宮、三笠宮の各皇族方
- 9、外国王室から国王、王妃などが国賓として来日したような場合、その滞日中の言動については皇室に準じて敬語を使う。

このように統一され、「読売新聞」「毎日新聞」などのほかの多くの新聞もこの原則に沿っている。以上のような、新聞記事における皇室敬語のルールをふまえ、北米邦字新聞「加州毎日新聞」の敬語使用を検討する。

5、資料と分析

資料は『加州毎日新聞』において、敬語使用の状況が顕著に認められる1951年8月8日、11月15日、27日、29日および翌月12月29日の記事を分析対象として取

り上げたい。特に『加州毎日新聞』12月29日付け「十八歳になられた皇太子様 御心境を語らせ給う」は、『朝日新聞』12月23日付け「明春、学習院大学へ 皇太子さま成年に」をもとに、あるいはまったく同じ内容を配信したものと考えられる。したがって、これによる両紙の比較は、北米日系人社会の言語の特質を知る手がかりにもなりうるとの考えから紹介しておく。

〔資料〕

資料は天理図書館蔵の「加州毎日新聞」（実物）を使用した。したがって、使用文字の判読は比較的容易であったが、印刷の関係で判読不可能な箇所はルビ等の表記を控えることとした。なお、資料中における文字およびルビはできるだけ原資料の使用に従った。

加州毎日新聞（1951年8月8日）資料1

皇太子御成年で妃になる方御選擇 元皇族や五攝家の姫君（見出し）

くわうたいし ごけっこん ないちやうたうきやく ない じゅんび くわう し
皇太子さまの御結婚につきすでに宮内廳當局は内々に準備をはじめている。皇太子さま

きた さい せいねん たつ ないやうたうきやく たいしやうてんのう
も来る一二月二三日には満十八歳の成年に達せられるので、宮内廳當局としては大正天

きんじやうへい かごけつこんたうじ せんれい こうほしや ないてうさ ひこうしき おこ こうたい
今上陛下の御結婚當時を先例とし候補者の内調査を非公式に行つているものである。皇太

し ひでんか らい たうぜん にほんこく しやうちやう てんのうへいか くわうこう
子さまの妃殿下は将来は當然日本國の象徴たるべき天皇陛下の皇后となられるにふさわし

ちよせい でうけん きたしらかわけ に もとくわうぞく け せんかう
い女性であることが條件で、まず北白川家 久邇家などの元皇族十一家のうちから選考が

つぎ もとくわうぞく せつ せいかわ とくかわ とくかわ もとたい
はじめられている。次に元華族、五攝家、清華家、あるいは徳川宗家、徳川御三家、元大

みやう もとこうこうしやく じゅん せんかう
大名家、元公侯爵家の順で選考が行われる。（後略）

加州毎日新聞（1951年11月15日）資料2

大阪孤兒等に宮城で陛下からお言葉 ご苦勞です皆大きくなつたね（見出し）

きほう りつは わたし いただ さ か あこが くわう い しうせんいらい
既報『立派になつた私たちをみて戴きたい』と去る五日から憧れの皇居に入り終戦以来

ど て い あ くれたけれうふきん しん にぎ くは
一度も手を入れられず、荒れるがままになつていた呉竹寮附近で一心に握る鍬やモツコの

おも わす せいさう おおさか こじ はくあいしやまき あきらくん

重たさも忘れ清掃をつづけてきた大阪の孤児たちに十三博愛社榎尾明君（一七）一ら三十

めい こ せいさうほうしたい あさ かんげき あら へいか め きくわい
五名の孤児清掃奉仕隊にいいよ六日朝、四年前の感激を新たに陛下にお眼にかかる機会

が訪れた。（後略）

加州毎日新聞（1951年11月27日）資料3

近畿御旅行 美吉野園で孤児等を御激励（見出し）

ならはつ きん ごりよこう せい にち てんのうへいか しゆくしやよしのやまさくらくわだん
かい へや まど
（奈良發）近畿御旅行第八日の十九日、天皇陛下は宿舎吉野櫻花壇の四階お部屋の窓から

たに へだ あさ によいりんじ たふ なか ほん おく ほん さくら こうえふ きようみふか
谷を隔てて朝日に映える如意輪寺の塔や中の千本、奥の千本の櫻とカエデの紅葉を興味深

ごぜん じ ふんどうしよ はつ よしのやま やまと だい ごりよ はい
くながめられ午前八時五十分同所御發、吉野山を下り大和路第二日の御旅行に入られた。

ごぜん よしのぐんあおよど みよしのえん はくかう こじ らう ごげきかい うちぐん でうまち くわんげいちやう どう
午前中は吉野郡大淀美吉野園で薄幸の孤児や老人を御激励 宇智郡五條町の歓迎場から同

とうあせいかうくわいしや せいざうこうちやう きかい あさ た みなみかつぐん しよまち
町東亜網會社のマニラロープ製造工場で機械の音と麻クズの中に立たれ、南葛城郡御所町

けふわせいやくくわいしや やまとばいやくぎやうしやうにん ぎやうしやうすがた め
たかた し くわんげいちやう のぞ
の協和製薬會社では 大和賣薬行商人の行商姿 に眼を止められ、大和高田市の歓迎場に臨

にちほうたかた こうちやう ごしさつ なかには ちよこういん まじ やく じゆげふいん むか う
まれ、日紡高田工場を御視察、中庭で女工員を交えた約四千名の従業員の出迎えを受けら

れた。（後略）

加州毎日新聞（1951年11月29日）資料4

京大不敬事件に關し大阪新聞の論説 教育當局者の不認識（見出し）

てんのう きょうだい かう さい あか がくせい わ たい へいか いけん がくちやう き もら
天皇の京大行幸に際して赤い學生が『平和に對する陛下の意見を學長から聞いて貰いたい

へいか ちよくせつ くわい もら かわ えうきやう がくちやう てんのう
陛下に直接面會させて貰いたい』などという變つた要求を學長につきつけ、また、『天皇

かみ かうしやう へいか むか
を神にするな』のプラカードをかかげインターを高唱して陛下を迎えたということである

こくみん くわうけい おも ばんがくと おも じやうしき
が國民はこの光景をどう思うであろうか。また、一般學徒はどう思うであろうか。常識と

りやうしき うつた み ことから しんかく だつひ てんのう にんげん どうじ ほん
良識に訴えて見たい事柄である。神格を脱皮され天皇は一個の人間であるが、同時に日本

しやうちやう くに しやうちやう たい けいい はら こくみん れいぎ
の象徴である。国の象徴に對してはそれだけの敬意を拂うのが國民としての禮儀であるこ

かんが
とを、まずわれわれらは考えたい。（後略）

加州毎日新聞（1951年12月29日）資料5
十八歳になられた皇太子御心を語らせ給う（見出し）

がくしふいんくわとうくわ さいがく くわうたい にち さい くわうしつてんはん きてい くわうぞく
學習院高等科に在學中の皇太子さまは、二十三日で十八歳 皇室典範の規定により皇族と

せい ないちやう たんしやうひ きくわい よてい くわう
して成年になられた。宮内廳ではかねてお誕生日を機会に行う豫定であった皇太子ならび

せい しき ていめいくわうこう おんも みやう あき えんき にち しょ でんか
に成年式は貞明皇后の御喪のため明年秋に延期 二十三日は御所で殿下だけが心ばかりの

ぜん うちいかい ひ きくわい
祝の膳につかれるだけで、内祝というほどのことも行われぬ。ただ『成年の日』を機会

とうぐうしよく でんいしくわんせい あらた とう じ ちやう のむら けんにな しみづ とだ くるき はま
に東宮職の傳育官制度を改め、東宮侍従長（野村大夫兼任（侍従、清水、戸田、黒木、浜

をでんいしくわん お らいしゆんかうとうくわそつけふ がくしふいん がくせいけいがくぶ しんがく しやうらいしやうちやう
尾傳育官）を置き、来春高等科卒業とともに學習院大學政經學部に進学され、將來の象徴

お い しうとく しうがく たんしやうひ

きしやだん せい
としての御身位にふさわしい修徳、修学にはげまされ、お誕生日を前に記者団で、『成年

しんきやう しつもん くろき えうつぎ こた
の御心境』など質問書を提出したのに対し、黒木侍従を通じて大要次のようにお答えにな

った。

とく しんきやう もの せいかく ちしき も
特に心境をいうほどではありませんが物事を正確につかみ、しつかりした知識を持

はんだん ひと
つようにしたいと思います。そしてよい判断とモラル、バックボーンのある人になり

たいものです。

朝日新聞（昭和26年12月23日）資料6
明春、学習院大学へ 皇太子さま成年に（見出し）

学習院高等科に在学中の皇太子さまは、二十三日で十八歳、皇室典範の規定により皇族として成年になられた。宮内庁ではかねてお誕生日を機会に行う予定であった皇太子ならびに成年式は貞明皇后の御喪のため明年秋に延期 二十三日は御所で殿下だけが心ばかりの祝の膳につかれるだけで、内祝というほどのことも行われぬ。ただ『成年の日』を機会に東宮職の傳育官制度を改め、東宮侍従長（野村大夫兼任）（侍従、清水、戸田、黒木、浜尾傳育官）を置き、来春高等科卒業とともに学習院大学政経学部に進学され当分学生生活を続けながら将来の象徴としての御身位にふさわしい修徳、修学にはげまれる お誕生日を前に記者団で、『成年の御心境』など質問書を提出したのに対し、黒木侍従を通じて大要次のようにお答えになった。

特に心境をいうほどではありませんが物事を正確につかみ、しつかりした知識を持つようにしたいと思います。よい判断とモラル・バックボーンのある人になりたいものです。

〔分析〕

「加州毎日新聞」における皇室敬語について、資料とした各紙面について検討してみる。
御成年・皇太子さま・御結婚・達せられる・天皇陛下・妃殿下（「加州毎日新聞」1951年8月8日・資料1）

宮城・陛下・お言葉・皇居・お眼にかかる（「加州毎日新聞」1951年11月15日・資料2）

御旅行・御激励・お部屋・ながめられ・御發・御旅行・入られた・立たれ・止められ
臨まれ・御視察・受けられた（「加州毎日新聞」1951年11月27日・資料3）

（京大）不敬事件・行幸・陛下・脱皮され（「加州毎日新聞」1951年11月29日・資料4）

なられた・語らせ給う・皇太子さま・御喪・御所・殿下・つかれる・進学され・御身位はげまされ（？）・お誕生日・御心境・お答えになった（「加州毎日新聞」1951年

12月29日・資料5)

皇太子さま・なられた・御喪・御所・殿下・つかれる・進学され・御身位・はげまれる お誕生日・御心境・お答えになった(「朝日新聞」昭和26年12月23日・資料6)

上に掲げた1951年の「加州毎日新聞」によれば、資料1「達せられる」・資料2「宮城」・資料4「(京大)不敬(事件)」・「行幸」・資料5「語らせ給う」以外の用例については昭和22年の基本合意「これまで、皇室に関する敬語として、特別にむすかしい漢語が多く使われてきたが、これからは、普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使う」あるいは、それを受けて作成された「新聞用語の手びき」(朝日新聞)のなかの「皇室用語集」の用例に準拠しているものと考えられる。

「加州毎日新聞」における、資料1「達せられる」・資料2「宮城」・資料4「(京大)不敬(事件)」・「行幸」・資料5「語らせ給う」の用例は、当時すでに我が国の新聞記事においてはほとんど使用されない古い用例ということになる。このうち資料2・5については見出しにおいてそれぞれ「宮城」あるいは「語らせ給う」となっているものが、本文では「皇居」、「お答えになった」と新しい表現がもちいられている。また資料4「京大不敬事件」および「行幸」については、この記事自体を「大阪新聞」の引用としているため、詳細は後の調査の結果に委ねなければならないものの、当時の主要新聞には「京大事件」としか表現されておらず、その取り上げ方も戦前の残映を見る思いがする。

以上のように「加州毎日新聞」では、日本国内の主要新聞あるいは共同・時事といった通信社からの配信によって、日本本国をアツかった記事の本文に関しては、ほぼ当時国内で合意されていた「皇室敬語」のルールが適応されている。しかしながら、記事の取り扱い方や見出し語には独自の見解が存在し、それはより古い形式の敬語使用、もしくはより厳格な皇室敬語を使用するといった特徴が認められるのである。

関連文献

国立国語研究所(1952)『語彙調査 一現代新聞用語の一例一』

朝日新聞(1956)『新聞用語の手びき 1956年改訂版』

新日米新聞社(1961)『米国日系人百年史』

伊藤和男(1973)『北米百年桜』貿易出版社

片山朝雄(1983)『ゆれ動く言葉と新聞』南雲堂

上坂冬子(1985)『おばあちゃんのユタ日報』文芸春秋

渡辺友左(1986)「新聞記事における皇室への敬語表現の歴史と現状」『社会変化と敬語行動の標準』(国立国語研究所報告86)秀英出版

ロバートソン藜子(1986)『日米・新聞記事よみくらべ』PHP

田村紀雄編(1986)『米国初期の日本語新聞』勁草書房

移民研究会(1994)『日本の移民研究』日本アソシエーツ